

# シェリーのユーモア考

新 名 ますみ

「シェリーって詩人はユーモアがないね。何故あんなに笑えないんだろう？」

筆者のさして長くもないシェリー研究歴において、上記の質問を受けたのは記憶に留まっているだけでも数回に及ぶ。その度に、何も笑えないのはシェリーに限るまいと反感を覚えつつ、結局苦笑いしてその場をやり過ごしてきた。他の詩人の専門家たちも同様のコメントを聞かされている可能性もあるのだが、どうもシェリーはユーモア欠落においては目立つ存在のようだ。

それも一つは彼の若さや女性的な風貌が原因かも知れない。残された肖像画がしかめっ面の老人のものであれば、ユーモアなど誰も期待しないだろうし、その意味では、彼の抒情詩にも、感情的であるはずという先入観を与える点で責任を問えるだろう。いや、やはり何よりもバイロンとの友情が災いしていると考えるのが妥当である。風刺的な機知と諧謔においては並ぶものがない友人を比較対象にされては、シェリーが可哀想になるのだが、単純な図式を描けば、シニカルなバイロンに対してシェリーは理想主義の人物である。楽天的な彼こそ、更にユーモアに溢れた詩を書くはずだという思い込みを持ち易いのだろうか。

このような憶測はさておき、専門家の眼からしてもシェリーにユーモアの要素が乏しいのは事実である。彼は同時代の喜劇を侮蔑していたし、常に真面目でにこりともしなかったという証言もある。しかし、それには生活におけるものだけでなく、彼の革命思想が大

いに関わってくる。人類を啓蒙し世界を再生させるという彼の目的意識の中では、達成後に得られる理想態として歓喜が存在しても、笑い自体は推進力ではなかった。革命にまっすぐ突き進む彼の情熱の中で、読者に笑いを喚起するという逸脱は許されるものではなかったはずである。

シェリーにとって笑いは負の要素を持ちやすいものであった。シェリーが当時の喜劇を批判したのは、その笑いの性質に問題があっ

たためである。登場人物が醜悪な人間性をさらけ出す喜劇において、観客の笑いは軽蔑と優越感に支配される。その笑いには何の道徳性も普遍性もなく、誤った自己満足が得られるのみである。それはまさしく、シェリーが圧制者たちの傲慢と非道を描くときに用いた笑いと同種のものであった。

『チェンチー族』でも『プロメテウス解縛』や『無秩序の仮面』でも、暴君たちは弱者を踏みつけにして残忍に嘲笑するのである。笑いは怒りよりも効果的な武器であり、暴政の象徴となっている。これは『プロメテウス解縛』の第4幕で見られるような理想界での笑いと、あらゆる点で対照的である。強者の笑いは、不正で暴力的というだけでなく自己中心的であり、他のものと共存することにより己を拡大していこうという志向に欠けている。凡てが共感し一体となる理想界とは違い、革命を経ずとも既に自己閉塞という破滅の道を辿る笑いなのである。

この負の笑いに注目することで、シェリー

この負の笑いに注目することで、シェリー



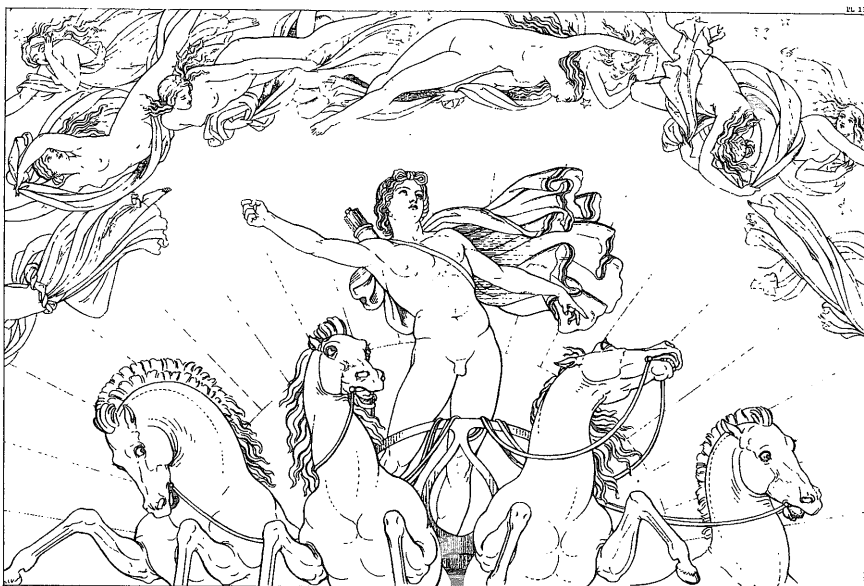
Percy B. Shelly  
Shelly' poetical works, aldine editionより

のユーモア観がほの見えてくる。優れたユーモアには当然風刺の要素が加わって然るべきなのだが、彼は風刺に対しては殊の外慎重である。「風刺についての風刺」という断片詩がある。彼はその中で、風刺は復讐と攻撃のための武器であり、自己中心的な作用は人を正しくも賢くもしないと断じている。つまり、それは負の笑いと同じ自己閉塞のシステムであって、詩人が追求すべきものではないというのである。無論シェリーにも風刺作品はあり、『マブ女王』のキリストについての言及や、『無秩序の仮面』や『暴君スウェルフット』の風刺性は無視できない。しかし、これらの作品にはシェリーの否定した風刺とは異なる点が含まれているようである。『マブ女王』ではキリスト本人ではなく制度批判的をずらしてあるし、『無秩序の仮面』でも楽観的すぎるほど希望に満ちた予言を以て終わっている。『スウェルフット』に至っては、登場人物を豚に設定するなど、グロテスクながら喜劇性に徹している。即ち、シェリーの風刺は友愛や希望というものを同時に与える構造となっているのである。

シェリーのユーモアも風刺と同じ基盤に立っている。他人を貶めるのではなく、人や社会との共感に根ざしたもの。自己に拘泥しない、普遍的かつ超越的な視点。やや個人的ではあ

るが、『マリーア・ギズバーンへの手紙』はこの種のユーモアを見出せる好作品であろう。自分の科学趣味と絡めて宗教批判をするが、その表現は機知に富み可笑しみさえ感じさせる。友人たちについては、疎遠になった者や政府の職を受けた者、はたまた借金取りに迫られる者などを、軽妙な口調で揶揄している。そこには毒のないアイロニーが友情と縋い交ぜになっている。

この作品には詩人としての自らの描写も登場する。自分の詩が不滅ではないこと、力弱い文しか書けないことを十分承知しながら黙々と詩作を続ける姿は、未熟な若造でも自己憐憫に陥った孤高の人でもない。淡々と客観的に自分を見つめ、自己嫌悪ではなく滑稽さを感じているシェリーがそこにいる。この自己を笑うスタイル(self-mockery)こそ、彼のユーモアの型と言えるのではないか。彼が明らかに自分を劇化しているのは『ジュリアンとマッドロ』である。これは表面上は理想主義を悲観論と戦わすための構図に見えながら、実はジュリアン(=シェリー)のナイーブさを暴露する内容になっている。経験豊かなマッドロに対しても、凡ての楽観論を萎ませるような狂人という実例を前にしても、ジュリアンは明るい未来を信じ続ける。その極端な姿勢に、読者はいささかなりとも呆れてしまう。



Compositions from Shelley's Prometheus unbound by J. Noel Paton より

狂人を助けられると確信しながら帰国したり、マッドロの娘に事の真相を話すよう強要したりする姿も滑稽感を誘う。これはジュリアンの純粋さや信念の強さを謳ったものというより、自分の理想主義を揶揄したのだと考えるべきだろう。マッドロや狂人を一つの視点と位置づけることにより、自らの思想を軽妙に皮肉ってみたのである。

ここで重要なのは、笑いの対象となる自分の他に、もう一つ詩人の典型が示されていることである。狂人はその音楽や語り口の美しさから詩人と呼ぶに相応しく、ジュリアンたちもそう認めている。絶望の狂気に陥り自己の檻から抜け出せない狂人は、詩人を待ち受ける悲劇の運命を体現しているのである。辿ってはいけない途ではあるが、感性の強い詩人ならばその磁力を無視できないだろう。シェリーは自分が陥る一つの可能性として、狂人を登場させたのではないだろうか。恐怖と悲嘆の対象である自身が対極にいるからこそ、又はそれを強調するためにこそ、笑える自分というものが存在できたのである。

二人の自分という同様の構図は『アラスター』にも見られる。悲劇の死を遂げた若者を、超自然の力に頼ってでも蘇らせたいと願う語り

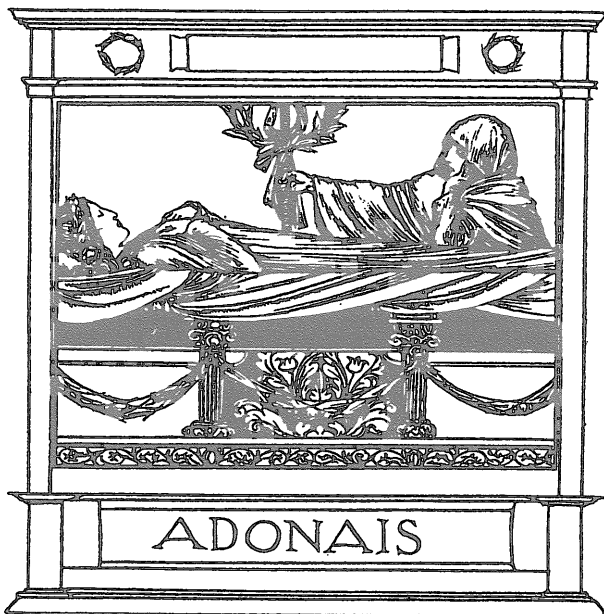
手。それは一種自然と和解して死んだ主人公には不釣り合いのように見えるし、語り手の常識的な科白は、若者の美しい死と好対照で滑稽でさえある。若者も狂人も、自己の小世界に縛られて外界との接触を断ったという点で、非難されるべき存在ではあるが、他方その美と偉大さは理想ともなり得る。実人生と関わり合い揶揄もされるジュリアンや語り手は、等身大の自分と言える。シェリーは一方に悲劇というアイロニーを、他方にユーモアというアイロニーを与えることで、詩人の二面性を表現したのである。

最後に、再びシェリー自身の登場する『アドネイス』を見てみよう。31連から34連にかけてシェリーらしい儂げな人物が弔問に訪れる。彼の姿はあまりにもか弱く感傷的に描かれ、滑稽感よりも悲壮感の方が漂う。これは、もう一人の詩人の典型たるアドネイスの死が悲劇に終始していないからだろうか。現世を抜け出して永遠の高みに上る理想像として描かれているため、悲劇性の対照として滑稽な自画像を示す必要がなくなったせいだろうか。ジュリアンも『アラスター』の語り手も、十分同情しながらもその対象とは距離を保っていた。しかし、『アドネイス』のシェ

リーは主人公と一つになって、不滅の世界に旅立とうとしている。アドネイスの偉大さを強調するためには、寧ろ己の描写は儂い方が相応しく、既にユーモアは不要なのである。

それでも『アドネイス』でユーモアを探すとすれば、51連以降を見ればよい。主人公の後を追うことを既に決心しながらも、幾度となく躊躇い怯える自分。その姿は超人的なものではなく、我々と同じ人間らしく親しみやすい一面を見せてくれる。最終連で永遠の世界へ運ばれていくときの彼も、やはり恐る恐るである。そこに漂う仄かなユーモアは我々の頬に共感と理解の笑みを誘い、彼の心境とその先に待ち受ける世界を想像する力を与えてくれるのである。

(慶應義塾大学非常勤講師)



Illustrated by Robert Anning Bell.  
Poems by Percy Bysshe Shelleyより